2013/08/01　阿部 江美子

《新版・十帖源氏「紅葉賀」Ver.2》

■主な登場人物

・光源氏　　この物語の主人公。
・紫の上　　光源氏が密かに養育している少女。兵部卿宮の娘で、藤壺の姪。

・桐壺帝　　現在の帝。
・藤壺　　桐壺帝の妃の一人。
・若宮　　藤壺が生んだ皇子。実は光源氏と藤壺の息子。後の冷泉院。

・頭中将　　左大臣の息子。光源氏の親友でライバル。
・葵の上　　光源氏の妻。頭の中将の妹。

・王命婦　　藤壺付きの侍女。
・源典侍　　桐壺帝付きの侍女。

■その他の登場人物

・東宮（春宮）　現在の皇太子。後の朱雀院。
・弘徽殿女御　桐壺帝の妃の一人。東宮の母親。
・承香殿女御　桐壺帝の妃の一人。第四皇子の母親。
・第四皇子　　桐壺帝の四番目の息子。
・兵部卿宮　　皇族。藤壺の兄で、紫の上の父。
・左大臣　　有力な貴族。頭の中将と葵の上の父。

『十帖源氏』巻二「紅葉賀」（121～133p）

〔５９・オ〕

【翻字本文】

紅葉賀　〔割・源十七才十八才〕

朱雀院の行幸は、神無月十日あまり、試楽を
せさせ給ふ。源氏の君と頭中将青海波まひ給ふ
に、人みな涙おとしけり。みかど、藤つぼに、「けふの青
海波のおもしろきを、いかゞ見給ひつや」と聞え
給ふ。次の日、源より、藤つぼへ、

物おもふに　たちまふべくも　あらぬ身の
袖うちふりし　こゝろしりきや
から人の　袖ふる事は　とをけれど
たちにつけて　あはれとは見き　　（「たちに」原文通り）

【現代語訳】

紅葉賀　〔割・〈光源氏〉が十七才から十八才の間の出来事です〕

朱雀院（離宮）への〈桐壺帝〉のご訪問は、神無月（十月）十日過ぎと決まったので、〈桐壺帝〉はその時に披露させる舞の予行演習を
させます。〈光源氏〉と〈頭中将〉が雅楽の青海波を舞う
と、見ている人々は皆感動して涙を流しました。〈桐壺帝〉は、〈藤壺〉に、「今日の青
海波がすばらしい出来ばえだったのを見て、どのように感じましたか」と、おたずねに
なります。次の日、〈光源氏〉から、〈藤壺〉へ（次の歌を贈ります）、

物おもふに　たちまふべくも　あらぬ身の
袖うちふりし　こゝろしりきや

（この〈光源氏〉の歌に対して、〈藤壺〉は次の歌を返します）

から人の　袖ふる事は　とをけれど
たちゐにつけて　あはれとは見き

〔５９・ウ〕

〈絵１〉桐壺帝が朱雀院を訪れた時、光源氏と頭中将が、青海波を舞う場面。

〔６０・オ〕

【翻字本文】

行幸には、春宮みこたち、世にのこる人なし。
がくの舟、こまもろこしとかざり、紅葉の陰に
四十人のかいしろ物の音吹たてたり。青海波の
かゞやき出たるに、かざしのもみぢいたうちり

て、菊をおりてさしかへ給ふ。承香殿の御はら
の四のみこ、まだわらはにて、秋風楽まひ給ふ。
其夜、源氏正三位し給ふ。頭中将正下のかゝゐ
し給へり。藤つぼは懐妊ゆへ参らせ給はず。源は、
藤つぼのすみ給ふ三条の宮へおはしたるに、
むらさきの上の父兵部卿宮も参り給ひて、御
物がたりなど聞え給ふ。源をむこになどはおぼし

【現代語訳】
《〈桐壺帝〉の朱雀院ご訪問》には、〈東宮〉（現皇太子である後の〈朱雀院〉）や親王たちをはじめとして、そのほか世間の人々は残らずお供します。
（庭の池に）楽団の舟を浮かべ、高麗・唐とかざり、紅葉の木蔭では
四十人の演奏者たちが笛を吹いています。《光源氏》と《頭中将》の二人が、《青海波》を
輝くばかりに《舞い》始めます。その時、〈光源氏〉の冠に飾った紅葉の葉がひどく散ってしまった
ので、菊の花を折って紅葉にさしかえます。〈桐壺帝〉の妃の一人である〈承香殿女御〉が生んだ〈第四皇子〉が、まだ成人前の子供の姿で、秋風楽を披露します。
この日の夜、〈光源氏〉は（従三位から一つ上の階級の）正三位へ昇進します。〈頭中将〉も（従四位上から一つ上の正四位下へ）昇進
しました。〈藤壺〉は出産をひかえているので朱雀院へは行きません。〈光源氏〉は、
〈藤壺〉が（一時的に宮殿を出て）住んでいる三条の宮を訪れます。するとそこに
（〈藤壺〉の兄で）〈紫の上〉の父親である〈兵部卿宮〉も来て、
二人であれこれ話をします。〈兵部卿宮〉は〈光源氏〉が自分の娘の婿になっているなどとは思いも

〔６０・ウ〕
【翻字本文】
よらで、「いとめでたき御さまかな」と、見たてまつり
給ふ。年あけて、源は朝拝に参り給ふとて、紫
のうへをさしのぞき、「けふよりは〔傍・け＝源詞〕おとなしくなり
給へり」とて、打ゑみ給ふ。ひいなをしすへて、三尺
のみづし、又ちいさき屋どもあつめて、あそび
給へり。

【現代語訳】
よらず、「とてもすばらしい容姿だ」と、思って見て
います。新年になって、〈光源氏〉は《一月一日》に行われる朝拝という儀式に参加するために宮殿へ行きます。《光源氏》は出発前に《紫
の上》の部屋に《たちよる》と、「（年が明けて）今日からは（一つ年齢を重ねて）大人っぽくなり
ましたね」と、言ってほほ笑みます。その時《紫の上》は人形を座らせて、三尺の高さの

戸棚や、他にも人形のための小さな家をいくつか並べて、《人形遊び》をしています。

〔６１・オ〕

〈絵２〉一月一日、宮殿へ行く前に、光源氏が、紫の上の部屋にたちよる場面。紫の上は、人形遊びをしている。

〔６１・ウ〕

【翻字本文】

内より大殿へ参給へば、葵の上、れいのよそ／＼しき
御気しき也。「ことしよりすこしよづきて見え給はゞ、
うれしからん」と、おぼす。藤壺は〔傍・藤＝合点〕、正月もたちて、二月
十日あまりにおとこみこうみ給ふ〔割・冷泉院／是也〕。みかどは
此若宮をゆかしくおぼしたり。あさましきまで
源によくに給へば、人の思ひとがめんと、むつかし
げなるもことはり也。源もいまだ見給はで、命婦に、

いかさまに　むかしむすべる　ちぎりにて
この世にかゝる　中のへだてぞ
〈命婦〉見てもおもふ　見ぬはたいかに　なげくらん
こやよの人の　まどふてふやみ

【現代語訳】

宮殿から〈左大臣〉の邸へ行くと、〈葵の上〉は、いつもの通りそっけない態度です。〈光源氏〉は、「〈葵の上〉が今年からは少しうちとけてくれたら、いいのになあ」と、思います。〈藤壺〉は、正月（一月）も過ぎ、やっと二月十日過ぎに皇子を産みます〔割・この子が後の〈冷泉院〉です〕。〈桐壺帝〉はこの〈若宮〉に早く会いたいとお思いです。（〈若宮〉の顔が）あまりにも〈光源氏〉とよく似ているので、誰かがあのことに気づくのではないかと、〈藤壺〉が怖がっている様子なのももっともなことです（なぜなら実は〈若宮〉は、〈藤壺〉と〈光源氏〉の許されない恋愛の結果生まれた子供だからです）。〈光源氏〉もまだ〈若宮〉に会えないので、〈王命婦〉に（次の歌を贈ります）、

いかさまに　むかしむすべる　ちぎりにて
この世にかゝる　中のへだてぞ

（この〈光源氏〉の歌に対して、〈王命婦〉は次の歌を返します）

〈命婦〉
見てもおもふ　見ぬはたいかに　なげくらん
こやよの人の　まどふてふやみ

〔６２・オ〕

【翻字本文】

此若宮のうつくしかりけるを、源見給て、せんざいの
とこなつさき出たるをおりて、命婦のかたへ、
**　よそへつゝ　みるに心は　なぐさまで**
**　露けさまさる　なでしこのはな**
藤つぼにこれを見せ奉りければ、
**　袖ぬるゝ　露のゆかりと　おもふにも**
**　なをうとまれぬ　やまとなでしこ**
むらさきの上を、源のかしづき給ふを、大とのには、
「誰をかさのみもてかしづき給ふらん」と、あやしく
おぼさる。内にもきこしめして、葵の上をいとおし
と、おぼしけり。源内侍のすけとて〔傍・源＝合点〕、年五十七、八なるが、

【現代語訳】

（四月になって）この〈若宮〉が愛らしい赤ちゃんであることを、〈光源氏〉は知ります。そこで、〈光源氏〉は庭の茂みで
咲き始めた常夏の花（撫子の別名）を折って、〈王命婦〉のもとへ（〈藤壺〉宛ての歌とともに贈ります）、
　よそへつゝ　みるに心は　なぐさまで
　露けさまさる　なでしこのはな
〈王命婦〉が〈藤壺〉にこれらを見せたので（〈藤壺〉は次の歌を返します）、
　袖ぬるゝ　露のゆかりと　おもふにも
　なをうとまれぬ　やまとなでしこ
〈紫の上〉を、〈光源氏〉が二条院で大切にお世話していると噂に聞いて、左大臣家では、
「どこの誰をそのようにお世話しているのだろう」と、不愉快に
思っています（〈光源氏〉は〈紫の上〉の素性を皆に秘密にしています）。〈桐壺帝〉もこの噂を聞きつけて、〈葵の上〉のことを気の毒だ
と、お思いになりました。（その頃〈桐壺帝〉に仕えている女官の中に）〈源典侍〉という、五十七、八歳で、

〔６２・ウ〕

【翻字本文】

いみじうあだめいたるあり。「などさしもさだ過る迄
みだるらん」と〔傍・と＝源〕おぼして、たはぶれ事いひて心み給ふ
に、うへの御けづりぐしにさぶらひはてゝ、このまし
げに見ゆるを、さすがに過しがたくて、ものすそ
をひきおどろかし給へば、扇をかざして見かへ
りたり。わがもたまへるあふぎにさしかへて見
給へば、歌あり。

君しこば　たなれのこまに　かりかはん
さかりすぎたる　したばなりとも
〈源〉さゝわけば　人やとがめん　いつとなく
こまなつくめる　もりのこがくれ

【現代語訳】
とても浮気な女性がいます。「どうしてそんなに年老いてまで
男にだらしがないのだろう」と、〈光源氏〉は思って、ふざけてこの〈源典侍〉に言い寄ってみます。
ある日のこと、〈桐壺帝〉の整髪を終えた〈源典侍〉が、どことなく好ましく
見えて、〈光源氏〉はやはりそれを見過ごすことができません。《光源氏》は《源典侍》が身につけている《裳のすそ》
を《ひっぱって》自分に注意を向けさせます。すると《源典侍》は、《扇》で顔を隠しながら《ふり
返り》ました。〈光源氏〉が自分の扇と交換して〈源典侍〉の扇を見て
みると、そこには歌が書かれています。
君しこば　たなれのこまに　かりかはん
さかりすぎたる　したばなりとも
（この〈源典侍〉の歌に対して、〈光源氏〉は次の歌を返します）
〈源〉
さゝわけば　人やとがめん　いつとなく
こまなつくめる　もりのこがくれ

〔６３・オ〕
〈絵３〉宮殿で、光源氏が、源典侍の着物をひっぱって、注意を向けさせる場面。源典侍は、扇で顔を隠しながら、光源氏を振り返った。

〔６３・ウ〕
【翻字本文】
うへはみさうじよりのぞかせ給て、わらはせ給ふ。頭中将
此事を聞て、我も此すけのこのみ心を見まほしう
おぼしたり。うんめいでんのわたりを、源たゝずみありき
給へば、内侍びはを引ゐたり。あづまやをうたひて
より給へれば、　内侍、
たちぬるゝ　人しもあらじ　あづま屋に
うたてもかゝる　あまそゝきかな
源「我ひとりしもきゝをふまじ」とて
人づまは　あなわづらはし　あづまやの
ま屋のあまりも　なれじとぞおもふ

頭中将見あらはさんとて、すこしまどろむにやと

【現代語訳】
〈桐壺帝〉はこの光景をふすまの間からのぞき見ていて、お笑いになります。〈頭中将〉は
この出来事を聞いて、「自分もこの〈源典侍〉の衰えない恋心に挑戦してみたい」と、
思っています。また別のある日、宮殿内にある温明殿という建物のあたりを、〈光源氏〉がぶらぶら歩いていると、〈源典侍〉が琵琶（楽器）を弾いています（温明殿には女官たちの詰め所があります)。〈光源氏〉が東屋（催馬楽の歌）を歌いながら
近づくと、〈源典侍〉は（次の歌を詠みかけてきます)、

　　たちぬるゝ　人しもあらじ　あづまやに
　　うたてもかゝる　あまそゝきかな

〈光源氏〉は「自分だけが〈源典侍〉の愚痴を聞くのは嫌だなあ」と、思って、歌を返します。

　　人づまは　あなわづらはし　あづま屋の
　　ま屋のあまりも　なれじとぞおもふ

〈頭中将〉は〈光源氏〉と〈源典侍〉の関係をつきとめようとしています。ある夜、二人が一緒にいて眠りかけていると

〔６４・オ〕
【翻字本文】
みゆるに、やをら入くるに、源は此人ともしり給はず、
屏風のうしろにかくれ給ぬ。頭中将、屏風をごほ／＼
とたゝみよせて、おどろ／＼しくさはがし。太刀を
ひきぬけば、内侍「あが君、／＼」と手をするに、うち
わらひぬ。源「いで此なをしきん」との給へば、つととらへ
てゆるし聞えず。「さらばもろ共に」とて、頭のおびを
ときてぬがせ給へり。　頭中将、
**　つゝむめる　名やもりいでん　ひきかはし**
**　かくほころぶる　中のころもに**
**　〈源〉かくれなき　物とする／＼　なつごろも**
**　きたるをうすき　心とぞ見る**

【現代語訳】
思われる頃、〈頭中将〉が〈源典侍〉の部屋へ忍びこんできます。〈光源氏〉は入ってきたのがこの人（〈頭中将〉）とは分からず、
（直衣という上着だけを持って）部屋にある屏風の後ろに隠れました。〈頭中将〉が、その屏風をばんばんと音をさせながら折りたたむと、その音がやかましく響きます。〈頭中将〉が太刀を
抜くと、〈源典侍〉は「あなた、あなた」と、言いながら手をすりあわせて懇願します。
それを見て〈頭中将〉は思わず笑ってしまいました。(侵入者の正体が分かったので、)〈光源氏〉が「ではこ

の直衣を着よう」と言うと、〈頭中将〉はさっと直衣をつかんで
着させません。〈光源氏〉は「それならあなたも同じ格好にするぞ」と、言って、〈頭中将〉の帯を
解いて直衣を脱がせてしまいました（二人でもみ合ううちに、〈光源氏〉の直衣の袖は縫い目がほつれて取れてしまいました)。〈頭中将〉は（次の歌を詠みます)、

　つゝむめる　名やもりいでん　ひきかはし
　かくほころぶる　中のころもに

（〈光源氏〉も次の歌を返します)

　〈源〉
　かくれなき　物とする／＼　なつごろも
　きたるをうすき　心とぞ見る

（〈光源氏〉と〈頭中将〉は、二人そろってふさわしくない服装のまま帰っていきます)

〔６４・ウ〕

【翻字本文】

内侍あさましくて、おちとまれる御さしぬき帯
など、つとめて奉れり。

　うらみても　いふかひぞなき　たちかさね
　ひきてかへりし　なみのなごりに
　〈源〉あらだちし　波にこゝろは　さはがねど
　よせけんいそを　いかゞうらみぬ

此御なをしの袖を、頭中将より奉らるれば、源

　中たえば　かごとやをふと　あやうさに
　はなだのおびは　とりてだにみず
　〈頭中将〉君にかく　ひきとられぬる　帯なれば
　かくてたえぬる　中とかこたん

【現代語訳】

〈源典侍〉はとんでもない目に遭ったとあきれて、あとに残っていた二人の指貫（袴）や帯
などを、次の日の朝〈光源氏〉に送り届けてきました（そこには〈源典侍〉の歌が添えてあります)。

　うらみても　いふかひぞなき　たちかさね
　ひきてかへりし　なみのなごりに

（この歌に対して〈光源氏〉は次の歌を返します)

　〈源〉
　あらだちし　波にこゝろは　さはがねど
　よせけんいそを　いかゞうらみぬ

一方〈頭中将〉のもとへは昨夜取れてしまった直衣の袖が間違って送られてきたので、〈頭中将〉はそれを〈光源氏〉へ返してきました。そこで〈光源氏〉は（次の歌を贈ります)、

　中たえば　かごとやをふと　あやうさに

はなだのおびは　とりてだにみず

（この歌に対して〈頭中将〉は次の歌を返します）

〈頭中将〉

君にかく　ひきとられぬる　帯なれば

かくてたえぬる　中とかこたん

〔６５・オ〕

【翻字本文】

源は宰相に成給ふ。藤つぼの若宮を春宮に

とおぼせど、御うしろみおはせねば、弘徽殿の女御

を引こして、藤壺を中宮にたて給ふ。入内也。

源も御供にて、御こしの内おもひやられて、

つきもせぬ　心のやみに　くるゝかな

雲ゐに人を　みるにつけても

【現代語訳】

（七月になって）〈光源氏〉は昇進して宰相という役職に就きます。帝の位を〈東宮〉へ譲ろうと考えている〈桐壺帝〉は、〈藤壺〉が生んだ〈若宮〉を次の東宮（皇太子）にしたいと

お思いです。しかし〈若宮〉には政治力のある後見人がいません。そこで昔からの妃で、今の東宮の母親でもある〈弘徽殿女御〉

をさしおいて、〈藤壺〉を中宮（皇后）にお決めになります。〈藤壺〉は中宮になる儀式を行います。

（〈藤壺〉が中宮になってから初めて宮殿へ行く夜、）〈光源氏〉もそのお供をしています。その時、〈光源氏〉は乗り物に乗っている人（〈藤壺〉）に思いをはせて、（次の歌を一人口ずさみます）

つきもせぬ　心のやみに　くるゝかな

雲ゐに人を　みるにつけても